

* これは実際の試験問題ではありません。
(This is NOT the actual test.)

No.000001

受験番号				
------	--	--	--	--

学習能力考査

人 文 科 学

資料及び問題

指示

係りの指示があるまでは絶対に中を開けないこと

0. (人類学。良問。)
1. この考査は、資料を読んで、あなたがその内容をどの程度理解し、分析し、また総合的に判断することができたかを調べるためのものです。
2. この冊子は前半が資料で、後半に 40 の問い(1-40)があります。
3. 考査時間は、「考査はじめ」の合図があってから正味 70 分です。資料を読む時間と解答を書く時間の区切りはありませんから、あわせて 70 分をどう使うかは自由です。
4. 解答のしかたは、問題の前に指示してあります答えが指示どおりでないと、たとえそれが正解であっても無効になりますから、解答の仕方をよく理解してから始めてください。
5. 答えはすべて、この冊子といっしょに配られる解答用カードの定められたところに、指示どおりに鉛筆を用いて書きいれてください。一度書いた答えを訂正するには、消しゴムできれに消してから、あらためて正しい答えを書いてください。
6. もしなにか書く必要があるときは、必ずこの冊子の余白を用い、解答用カードには絶対に書き入れないでください。この冊子以外の紙の使用は許されません。
7. 「考査やめ」の合図があつたらただちにやめて、この冊子と解答用カードとを係りが集め終わるまで待ってください。集める前に退場したり用紙をもちだすことは、絶対に許されません。
8. 指示について質問があるときは、係りに聞いてください。ただし資料と問題の内容に関する質問はいっさい受けません。

「受験番号」を解答用カードの定められたところに忘れずに書き入れること

人間とヒトの間

1

「ヒトは早産する動物である」とある生物学者が述べたことがある。もちろん、人間では、常識的に認められている期日より赤ちゃんが早く生まれがちだ、という意味ではない。

例外はあるが、多くの哺乳動物では、生まれてすぐの赤ちゃんでも、ある程度の生活能力を備えている。自力で立ち上がって、歩いて母親を探すこともできるし、その乳房に吸い付くこともできる。ところが、ヒトの赤ちゃんは、自分一人では何もできない。誰も十分に世話をしなければ、死んでしまうばかりだ。

本来なら、もっと長い間お母さんの胎内に留まって、ある程度独り立ちできるような状態になってから、ヒトの赤ちゃんも世の中に送り出されるはずだったのではないか。それが「早産する動物」と言われる意味だろう。

では何故「早産してしまう」のだろうか。理由ははっきりしている。ヒトの頭骨が大きいからだ。赤ちゃんがお母さんの胎内で独り立ちできるほど育ってしまったら、頭骨が大きすぎて、狭い産道を出て来られなくなるからだ。

言うまでもなく、ヒトの生物学上の最大の特徴は直立二足歩行である。直立二足歩行は、普通両手の解放をもたらしたと言われる。それはその通りだが、骨格の構造に関しても決定的な新しさを生んだ。四足歩行するイヌの骨格を考えてみればよい。あのまま、今よりも容積も重量もはるかに大きい頭骨を与えたらどうなるだろう。今のイヌの骨格がそれに耐えられないことは容易に想像がつく。どのような因果的な経過があったか、それをすべて説明できるわけではないにせよ、とにかく直立した脊椎のおかげで、実際にヒトの頭骨とその内容とは大きくなっていった。その大きな頭骨が充分発育するまでは、とても胎内に留めてはおけないので、ヒトの赤ちゃんは早めに外に出て来てしまう。「早産する動物」という表現は、こんな内容も含んでいたものと思われる。

ところで、こうしてヒトが直立二足歩行によって得た（実は失ったものも決して少なくはないと考えられるが）頭骨の発達のおかげで、ヒトは早産気味になるとすれば、そこからほとんど必然的にある重要な事態が結果する。すでに見たように、本来より早めに生まれてしまったヒトの赤ちゃんは、その段階では全く無力であって、一人では生きることが不可能である、ということがそれである。赤ちゃんが育つために、少なくとも母親との共同生活が絶対に不可欠なのだ。

「狼少年」や「狼少女」という話がある。つまり、何かの理由で、生まれたばかりのヒトの赤ちゃんが、ヒトによってではなく、オオカミなどの哺乳動物の家族のなかで育てられたと、いう話である。伝えられる話のすべてに信憑性があるわけではなく、ある程度割り引いて受け取らなければならないと、専門家は言うが、しかし、この話は、ヒトの赤

ちゃんには、たとえオオカミであっても、育ててくれる「母親」や家族がどうしても必要だということを教えてくれる。

それは哺乳動物に関しては一般に見られる特徴ではないか、という疑問は正当である。しかし、ヒトの場合には、頭骨、ひいては脳との関連で、このことが特別の意味をもってくるのである。

「狼少年」や「狼少女」の例がヒントになる。そうした特殊な事情にあったヒトの子供は、六、七歳までに、人間の社会に戻らなければ、言葉を覚えることができないとも言われている。人間として社会のなかに生きることができない、あるいはそれが著しく困難になる、とも言われる。

このような話から次のような推測が可能になる。生まれるまでは、胎児は、子宮によって保護され、育てられてきた。しかし、哺乳動物としては少し異例なほど早目に、そこから追い出され、世に送り出されてしまうヒトの個体にとって、母親を含む家族や、それを含む共同体は、出生後ほぼ七年ほどは、依然として一種の「子宮」、言わば「延長する子宮」だと考えられる。彼や彼女が世の中で初めて出会う共同体こそは、赤ちゃんを包み、育てる、もう一つの子宮ではなかろうか。そこで、ヒトは言葉を覚え、共同体のなかで暮らせるように訓練を受ける。一言で言えば、「人間」になっていくのだ。

そのことは、ヒトが直立二足歩行することから生まれる結果とも整合的である。言うまでもなく、上に述べたように、ヒトの頭骨が発達するにつれて、その内容である脳も発達する。しかし、大切なことは、脳の基礎的なところは、出生前の胎児の段階で大体出来上がってしまうが、ヒトに最も特徴的な新皮質の部分は、「早産」した後に、「延長する子宮」のなかで発育することだ。

常識として知られたことだが、念のために書いておこう。脊椎動物の脳（脳には、そのほかに、基礎的な生理現象を司る脳幹、小脳などがある）の表面を覆っている灰白質の層を「皮質」と呼ぶ。ここには、高度な働きをもつ神経細胞が密集している。新皮質というのは、ハチュウ類より高等な動物に見られるもので、下等な脊椎動物にも備わっている旧皮質と区別される。新皮質は、外界の認知や、学習、判断など、高度な知的機能を司ると言われるが、ヒトでは、この部分がとくに発達しており、言語を操る能力に関する部分もここに含まれる。ヒトの胎児が発生していくに当たっても、新皮質の部分は最後に形成され、またヒトの脳は、出生後も発育は終わらない。大体七歳くらいで、その発育が完成する、と考えられている。

もう一つ、直立二足歩行の結果ヒトが獲得した特性として、先に手の解放にも触れた。霊長類もまた巧みに手・指を使うが、ヒトの手の巧緻性が並外れていることは、熟達したヴァイオリニストの演奏を頭に思い浮かべるだけで十分だろう。もちろん、このような手の巧緻性の獲得は、出生後の脳新皮質の発育と連動している。七歳くらいまでに基礎訓練を終わっていると、例えばヴァイオリン演奏の技術的な側面に関してはあまり苦労せずに済むのも、知られた事実である。

さて、こうした大脳の新皮質の発育が、母親の子宮のなかに閉じ込められていて、果たして可能だろうか。子宮のなかの胎児は、言わば「水棲動物」で、運動もあまりできない。臍の緒を通じての母親を介した物質的なやりとりを除けば、入ってくる外界からの刺激はほぼ音だけである。それでも、胎児も結構いろいろなことをしているらしいことが、最近になってわかってきた。外からの人の声や音楽を聞いたり、退屈しているのかどうか、指をしゃぶったり、というわけだ。世の中に送り出されたときには、手の親指にしゃぶりだこが出来ていたという赤ちゃんもいるくらいだ。

しかし、刺激となる情報の瀬は、子宮のなかではなく、圧倒的に外にある。そして、大脳の新皮質の働きは、刺激によって発育する。だから早く外に出ることは、赤ちゃんの発育にとって、理に適ったことなのだ。もっとも近年、出生数時間から数日の、言わば生まれたばかりの赤ちゃんについて、面白い事実が次々に発見されてきた。その一つは、真似をすることができる、ということだ。赤ちゃんを抱いたお母さんが、赤ちゃんを見つめながらゆっくり舌を出す仕草を繰り返す。すると突然赤ちゃんもぺろっと舌を出す。昔は生まれたばかりの赤ちゃんは見えないのだと言われていた。しかし、上の事実は、少なくともある距離の範囲では、赤ちゃんは「見えて」いることを暗示している。もちろん、赤ちゃんが、お母さんの顔を眺め、お母さんが自分に向かって舌を出していると認識し、義理が悪いから自分もお付き合いで舌を出してやろう、と判断した結果、舌を出す。そんなわけではなかろう。しかし、視覚への刺激に反応していることだけは確かだと思われる。

もう一つ、新生児で驚くべきことは、彼らが「歩く」ことだ。もとより介助を受けてのことだが、両脇を支えられると、足を互い違いに前へ進めて、「歩く」仕草をするのだ。今では「原始歩行」などと名付けられている。この「歩く」ということは、ウマやウシでは、生まれて直ぐに可能な行動である。実はヒトも本来そうであったのだろうか。

大切なことがある。それは、この「真似をする」という能力も、「歩く」という能力も、生まれて数週間後には、一旦完全に消失する、という点である。

つまり、哺乳動物なら生まれたてでも本来備えているはずの能力を、ヒトも不完全ながら一部は備えている。しかし、どうやら、早めに生まれるヒトの赤ちゃんは、そうして本来用意されている能力を、出生後にそのまま育て、完成していったらいいのだ。ヒトにあっては、原則として刺激は、大脳を経由してから処理されるべきもの、だから、刺激の大海のなかで、赤ちゃんは、生まれた後も情報処理機構としての大脳の発育を自ら行わなければならない。よく知られているように、ヒトにあっては、刺激のなかには、大脳を経由しないままに処理されるものはたくさんある。しかし、そうした能力に頼っていたのでは、ヒトは人間としての行動が極めて貧しくなる。そこで、生まれた後、刺激の大海のなかに浸りながら、大脳を経由して刺激を処理する機構を、大脳のなかに整えるば

かりではなく、共同体という「延長する子宮」のなかで、どのようにそうした処理を行うか、その方法までも、学んでいくことになるのではないか。

3

言い換えれば、先にも述べたが、赤ちゃんは、お母さんの子宮のなかで「ヒト」として育ち、出生後しばらくは「延長する子宮」としての共同体のなかで、「人間」として育つのである。考えて見れば、日本語の「人間」という言葉は、なかなか奥行きが深い。「人間の」というのは、人間が、複数の人間たちの造る共同体のなかで生きることが必然であることを暗示している。

興味深いのは、ここでいう刺激にはありとあらゆる種類のものがあり、これまで「大海」という比喻を使ってきたが、人間は文字通り「刺激の大海」のなかにおかれている。脳の発育とともに、次第にそうした多種多様な刺激のなかから、ある種の刺激だけを選別し、それらに軽重を与え、意味や構造を読み取るようになることである。

私たちは、例えば視覚に与えられる刺激を、すべて、平等に、同じ重さで、認知しているわけではない。そこにお母さんの顔を見て取るためには、視覚に与えられている刺激のなかから、あるものは強調し、あるものは全く捨て、「大海」ではなく、一つのまとまりのある、意味や構造をもった「何もの」か、として掴まなければならない。そして、そのためには、言葉が大変大きな役割を果たしている。

ヘレン・ケラーが自伝で述べている、あの感動的な場面を見てみよう。ヘレンは七歳、三重苦のなかにあって、「濃い霧に閉ざされた」ような状態に置かれ、言わば荒れていた。そしてヘレンはサリヴァン先生に出会う。彼女は、ヘレンの手の上に文字を書くことから始める。人形をもてあそんでいたヘレンの手に、《doll》という文字が何度も綴られる。ヘレンはそれを一種の遊びとしか受け取らない。手のなかにある「人形」と、文字で綴られた《doll》とが結び付くとは思わない、というか、思えない。何日か、せっかくの人形を潰してしまうような焦燥の募る日々が過ぎる。そしてある日、サリヴァン先生はヘレンを外に連れ出す。次の引用は、子供の読者のために訳されたもの（今西祐行訳、講談社）によっている。

先生は、わたしの手をとってさしだし、ポンプからあふれでるつめたい水にさわらせました。そして、もういっぽうのわたしの手をとって、その手のひらに、はじめはゆっくりと、だんだんはやく《water》という字を、何回も書きつづけられました。

わたしは、いっぽうの手でつめたい水をかんじながら、もういっぽうの手のひらの、先生のゆびのうごきに、じっと全身の注意をそそいでいました。とつぜん、わたしは、なにかしらわすれているものを思い出すような、なんともいえないふしぎな気持ちになりました。こうして、わたしははじめて、手にかかるつめたいさわやかなものが《water》とい

うものだということを知りました。

はじめて、ことばというものを知ったのです。わたしをじっとおさえていた、あの目に見えない力がとりのぞかれ、くらいわたしの心の中に、光がさしてくるのがわかりました。[この翻訳は子供向きの書物なので、ここで《water》と書いた部分は、訳文では「水」という日本語で表現されている。この引用ではあえて英語に直した]

ヘレンは、本来なら子供たちがもっとずっと小さいころに、自然な体験の積み重ねのなかで掴んでいるはずのことを、七歳になって、初めて一挙に体験したのだ。自分の感覚に与えられる刺激の万華鏡のなかから、ある特定の感覚（を与えている何か）が、「水」という言葉との結び付きのなかで、一つの意味、一つの構造に凝縮したのだ。もはや、彼女にとって、その瞬間から、刺激の「大海」は失われた。それは、今や、分節化され、意味と、構造とを与えられた、一つの「世界」として、彼女の前に現れた。

ヘレンの場合は劇的である。この自伝の記事も、もちろん、すでに彼女が「世界」を獲得した後、言葉によって「世界」を表現することを学んでしまった後で書かれているから、そして、そのように書かれなければ、私たち読者には理解ができないから仕方がないが、やはり言葉のおかげで、当時の真の状態を表現してはいない。ここで語られている瞬間までの彼女のおかれた状態は、全く私たちには想像しかねるようなものだったはずだ。彼女の比喩を使えば、「濃い霧にとざされた」船のような状態、それは刺激の「大海」であり、感覚の万華鏡であり、しかも彼女は、今や何かを掴みかけて、苛立ち、かんしゃくを起こし、ただひたすら混乱のなかにいた。一言で言えば、彼女は「世界」をまだ頼む前の「無秩序」のなかにいた。そして「水」という単語一つが、事態を変えた。この例ほど、言葉の力を教えてくれるものも少ない。

4

普通の子供たちでは、ことはこれほど劇的には進まない。「延長する子宮」のなかで、ごく自然に子供たちは、このことを学んでいく。共同体のメンバーから、言葉を使って、話しかけられるという体験を積み重ねていく間に、彼らは、自分の周囲の「世界」の在り方を、そこで使われる言葉にいざなわれて、次第に会得していくのである。

こうして言葉は、その共同体に共通の「世界」を生み出す。言葉はコミュニケーションの道具だとよくいわれるが、人間どうしの中に言葉によってコミュニケーションが成り立つためには、少なくとも、ある程度共通の「世界」が共有されていなければならない。その意味では、言葉は先ず、共通の「世界」を生み出す働きをもつと考えられる。それが成り立って初めて、コミュニケーションが成立する素地が得られる。

ある種の哲学者たちは、そうした状況を表現するのに「間主観性」という言葉を造った。「主観」というのは、ここでは一人一人の個人を指していると考えてよい。したがって

「間主観性」というのは、複数の個人どうしの中に共通に成り立っていること、という意味である。せっかくこういう言葉があるのだから、利用することになると、共同体のなかで成立する「間主観性」に、子供がある程度十分参加できるようになるためには、出生後ほぼ七年くらいが必要であるらしい。「狼少年」、「狼少女」の例も、あるいは、大脳の発育が七歳程度まで続くという事実も、あるいは七歳あたりを区切りに、多くの国や地域で公教育が始まるという事実も、いずれもそうした点と関係がありそうだ。

「間主観性」を形造るのに、最も大きな働きをするのが言葉であることは間違いない。例えば、こんな調査記録が伝えられている。赤ちゃんのときから英語と日本語という二言語で育った、アメリカの日系の少女に、「どんな女性になりたいの」と訊ねる。それを日本語で訊ねられたときには、少女は「結婚してよい家庭を築きたい」と答え、英語の場合には「自立した女性として社会で有意義な仕事がしたい」と答えた、というのである。もちろん、この調査は、日常場面でさりげなく行われたのだが、言葉が人間の意識の在り方を規定する好例ではないか。

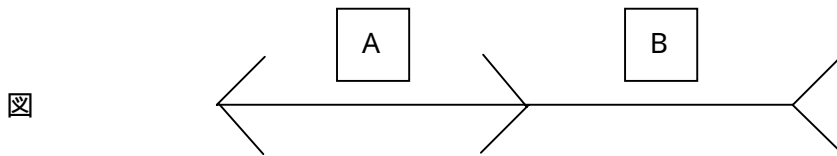
念のために書いておくが、この事実をもって、日本語が女性に対して「不当」だとか、「抑圧的」だとか判断するのは間違っていると思う。確かに、日本語は「自立して社会で有意義な仕事をしたい」と思う女性にとっては「抑圧的」に働き得るかもしれないが、逆にアメリカの女性のなかにも「よい結婚をして、よい家庭を築きたい」と願っている女性がいるに違いないし、そうした女性にとっては、英語（この場合はアメリカ語だが）は「抑圧的」であり得るのである。

それにしても、言葉を学ぶことは「人間」になることにほとんど等しいが、それは、「人間」が「文化」のなかの存在であることにも繋がる。ここでの「文化」という概念には、「文化包丁」とか「文化住宅」などという使われ方をしたときの「文化」の意味はない。要するに、ある共同体にあって、その成員である人間が知覚し、考慮し、判断し、行動するための、あらゆる装置の全体を「文化」と呼んでおく。すると、言葉は、そうした「文化」の相当部分を占めていることがわかる。

5

ここまでは、人間が「人間」であるための条件として、言葉の働きを強調してきた。人間の最大の特徴の一つが「言葉を使う」ということである以上、その点は強調し過ぎることはないと思う。しかし、共同体の「間主観的」な「世界」の形成が、言葉だけで行われると考えるとすれば、それは誇張になるだろう。あるいは「文化」が言葉だけで成り立っているかのように言うとしたら、それも間違いになるだろう。

例えば次のような絵を使った実験がある。よく知られた図形であるが、Aの部分もBの部分も同じ長さにしてある。この絵を被験者に見せて、どちらが長いかを訊ねるという実験である。



図

近代的な生活様式のなかで育った人間は、Bの方を長いと感じる。この実験を行った学者の解釈によれば、直角の多い、直線の多い住居に住むからだということになる。アフリカで原始的な生活を送る人々にあっては、Aの方が長いと感じる事例はるかに多い。同じ学者の解釈では、そうした人々は、天井や壁が丸く造られた住居に暮らしているからだ、という。その解釈が正しいのかどうか、はっきりしたことはわからない。ここに言葉の違い(例えば「長い」、あるいは「短い」という言葉の使い方の違い)の影響がないかどうか、それもはっきりとはわからない。しかし、こうした、ある「世界」(の一部)についての感じ方は、単に学んだ言葉の違いだけに帰することができないようなものであり得るし、より広汎な体験からの影響を疑わせるのもある。言葉に導かれて「間主観」的な「世界」が形成されていくにしても、そこには言葉以外の要素が連合されているように思われる。

知覚のあり方さえ「文化」によって異なることは、言葉も「文化」の一部、それも重要な一部である以上、すでに明らかなことだが、ここで言葉が直接的な影響力を示さないと思われる音楽について考えてみよう。

日本の音楽(といっても、何が日本本来の音楽であるか、という議論になると、日本人のルーツは何かという問題と同じく、やっかい千万になりかねない)は、ときに「よな抜き音階」でできている、などと言われたことがある。この表現は明治時代にヨーロッパの音楽を日本に取り入れるに当たって、日本人が言い始めたものらしいが、ヨーロッパ流の音階から「よな」を抜いたのが、日本の音階だと考えた結果である。このとき彼らが理解していた「ヨーロッパの音階」というのは、普通ドレミファソラシドといわれる基本音のことで、しかも、後に述べるような「平均律」の音階と解してよいが、明治時代には、そのド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シに、数を表す和名を当てはめて、「ひ・ふ・み・よ・い・む・な」という呼称を使っていた。そこで「よ、な」(ファ、シ)を抜くのが、「ドレミソラ」という五音で音階が構成されている、という意味になる。小学校唱歌として親しまれてきた『おぼろづきよ』の最初の一節は、「ミミドレーミソソラソ、レーミードレソミ」となって、見事に「ファとシ」が欠けている。

脱線をすれば、この音階は、実は中国に起源をもつ呂旋法と言われる音階の基本に近いし、あるいは、いわゆるスコットランドやアイルランドの民謡などで採用されているものにも近い。明治以降日本人が愛唱してきた唱歌に、スコットランドやアイルランドの民謡が原型になっているものが多いのも、そこに理由があるとも考えられる。もっとも、厳密に考えると、十九世紀にスコットランド民謡、アイルランド民謡として日本に伝えられた曲が、そうした地域本来の「民謡」あるいは伝統音楽と言えるのか、そこにも確かに問

題はある。

ところで言うまでもないが、日本の伝統的な音階には、「よな抜き」の音階のほかにも色々ある。「よな抜き」のミとラを少し下げた（近代ヨーロッパ流に言えば、「フラットを付けた」状態に近い）やや陰りのある、感傷的に聞こえる音階もあり、民謡では「ラドレミソラ」という音階や、またその変形もある。変形は地域によっても生じる。また沖縄の音階は、一般的には「ドミファソシド」で、言うならば「ふむ抜き」ということになる。

しかし、ここで大切なことは、では例えばピアノのドレミソラを使ったら、そのまま日本音楽がすべて表現できるか、とえば、日本にも「よな抜き」以外の旋法があることは別にしても、それは全く不可能である、という点である。

そもそもその点は、実はヨーロッパの音楽でも同じことで、ヨーロッパの諸地方に伝わる伝統的な音楽をピアノで弾いても、それらしきことはできても、決してぴったりというわけにはいかない。ある音は低すぎたり、ある音は高すぎたりする。それも、旋律のどの場所にその音が置かれているかによって、同じラでも少し高くとるべきだったり、低くとるべきだったりもすることにもなる。つまり、ピアノの半音よりもっと小さな幅の音も出てくる。そうだとすると、音階というような形で、音の在り方を人工的に整理してしまうことが、音楽にとって本来無理があることになる。

その上ピアノというのがそもそも曲者だ。もともとピアノなどの鍵盤楽器が生まれたお陰で、音階は無理やりにいわゆる「平均律」に造られるようになってしまったのだ。平均律とは、ドから次のドまでのオクターヴつまり八度の音程を、十二の半音に均等分割して音階を造ることである。鍵盤楽器は予め調律されてしまうので、演奏者が自分で望む音程で弾くことができない。どの音から始めても、一つの旋律は同じ旋律として聞こえなければならない、つまり西欧「正統」音楽の言葉を使えば、八長調でも二長調でもあるいは嬰へ長調でも、一つの旋律は「同じ」ように弾けなければならないという前提に立って、それを鍵盤楽器で弾くとなれば、オクターヴを「平等」に分割するほかはないのである。これは近代の「平等」思想の現れの一つだと言ったら、牽強附会と叱られるだろうか。

だからそれ以前の音楽について言えば、伝統音楽ばかりでなく、ヨーロッパの「正統」音楽全般も、そして鍵盤楽器の入らないヨーロッパの音楽は総じてどれも、「平均律」では聞き苦しくなるはずなのだ。まして、ヨーロッパ以外の音楽に、それがそのまま適切であるわけがないのである。

しかし、この平等律の音階に慣れた耳には、そうでない音の出てくる（例えば八度の十二等分のなかに入らない音、微分音などと言われる）音楽は、逆に耳障りに聞こえてしまう。例えば、日本の流行歌手でも、浪曲の世界から転向した人々の音程は、どちらかと言えば「シャープ」に（高めに）聞こえるのが普通で、だから「耳が悪い」などとも言われることがあるが、そこでいう「耳」とは、平均律の音階に慣れた「耳」のことになる。

何が正しい音程として聞こえるのか、という問いを普遍的、客観的に立てることが無意味であることがわかるだろう。それは文字通り「文化」に依存している。

もっと極端な話、ある民族のなかで歌われている「歌」が、別の民族の人々にとって、とても「歌」とは思われない、という状況を想像することもできる。

こうしてみると、人間は、ある共同体のなかで育つことによって、言葉によらない場面でも、外の世界の掴み方が、それぞれに異なってくることがよくわかる。ある民族にとってごく当たり前の食べ物が、別の民族にとってはどうしても受け入れられない、つまり食べられないということもある。ある共同体のなかで「美しい人」が、他の共同体ではグロテスクとしか見えないこともままある。もちろん同様のことは、同じ共同体のなかでも、時間をおけば、十分起こり得る。

言葉によって、世界を把握するための枠組みが与えられる。それはどちらかと言えば「知的」な活動に関わる「間主観性」である。しかし、共同体のなかで育つということは、どのような知覚的体験を美しいものとして受け入れるか、受け入れないか、というような、感性的な側面をも、左右することになるのである。別の言い方をすれば、ヒトという生物種には、個別の文化に帰属する共同体が言わば亜種として存在しており、それぞれの亜種の間では、他の生物における種がそうであるように、認知、判断、行動のパターンが共通になり、さらには感覚的な価値観さえもが共通になる、ということにもなるか。

6

こうした人間における亜種とも言える違い、一般に「文化」の違いと呼ばれるものは、外の世界の受け止め方、掴み方の総体であって、それは「延長する子宮」としての共同体が「間主観的」に共有する、広い意味での価値観でもある。繰り返すがヒトは、それを共同体のなかで学ぶことによって、「人間」になっていく。

しかし、さらに考えを進めてみると、そうした「間主観的」な価値観の学習は、「外の世界」、例えば視覚に写るもの、聴覚に訴えるもの、そうした外の世界についての意味や構造についての学習であると同時に、実は「自己」の形成そのものでもある。「主観」が形造られる過程なのである。

「間主観性」という言葉は、あたかも、すでに「主観」が成立していて、複数の「主観」の「間」に成り立つべきなものかを示すかのように感じられる。共同体を取り上げてみれば、確かにそうも言えるだろう。

けれども、少なくとも個体としてのヒトが、共同体のなかで一人の「人間」になっていく過程においては、「間主観性」の獲得はまた、その個人の「主観性」の成立と平行しているとかなければならない。ヒトは「間主観性」を学ぶことを通じて、「自分」つまり「主観性」をも造り上げていくことになる。その過程のなかでこそ、外の「世界」と区別された意味での「自分」が生まれ、いわゆる「自覚」あるいは「自意識」が形成される。別の言い方をすれば、「他者」との関わりのなかで、初めて人間は「自己」を掴むのである。もう一度ヘレン・ケラーの例を思い出すのもよいだろう。彼女はサリヴァン先生によって、「世

界」を知ると同時に、「自分」を知ることになったのだ。

面白いことに、人間は、その生物に種として本来備わった、基本的な行動パターン（しばしば「本能」と呼ばれる）から、すでにある程度「自由」である。他の動物のように、生得的に組み込まれた行動様式のままに行動するのではなく、そうした行動パターンから離れ、それを越えて行動することができる。それは、「延長する子宮」のなかで発育する大脳の新皮質を通じて、認知し、判断し、行動するような生物だからだろう。

しかし「延長する子宮」のなかでは、その個人が生きる共同体の「間主観性」を獲得することが求められている。その行動パターンに寄り添って行動する訓練を受ける。それが達成されなければヒトは人間になれない。「亜種」という形で「文化」を表現したのはそういう意味でもあった。

したがって、人間は共同体のなかで「間主観的」に成り立っている認知、判断、行動のパターンを身につけなければならないが、さらにその過捏のなかで初めて個人は「主観性」つまり「自己」を形成する。しかもなお、再び人間はそこにおいてある程度の自由をもつのだ。

つまり、そこで形成されていく「自己」は、完全な「間主観性」の「コピー」にはならない。「主観」は「間主観性」の要求から外れる自由を備えている。そこがまことに面白い。

キリスト教の立場に立つ人なら、それこそが、神が人間に与えた「自由」だと言うかもしれない。キリスト教では、共同体の命令どころか、神に背く自由さえも、神は人間に保証したと考えられており、実際にその自由を行使したために、人間の祖先たちは「失樂園」を体験しなければならなかった、と信じられている。神学的に厳密な議論は別にして、そうした「自由」を、ここで言う「自由」と重ねてみることは可能だろう。

それはともかく、人間は、生物学的な行動パターンからもある程度「自由」であるばかりでなく、共同体に「間主観的」に共有される行動パターンからもある程度自由なのである。

そうでなければ、ある共同体のなかの個人は、まるでクローン人間のように、誰もが同じように認知し、同じように判断し、同じように行動することになってしまう。人間の一人一人は、ある特定の「間主観性」のなかで育ち、そのなかに生きながら、なお、一つの「主観」としてそこから外れ、それを越えることができるし、実際にいくばくかは必ずそうするのが普通である。共同体によっては、そうした逸脱をできるだけ許さないような価値観を「間主観的」に備えているものもあり、あるいは、むしろある程度の逸脱を評価するような価値観を備えているものもある。

日本社会、アメリカ社会というような捉え方は、精緻な議論をするためにはややおおざっぱ過ぎるが、日本社会はどちらかというと前者であり、アメリカ社会は後者である、と言えるのかもしれない。

しかし、程度の差こそあれ、共同体は、その共同体に属する一人一人の個人が、その

「主観」の働きとして、根本的な「自由」を行使する余地を許している。というよりも、それを禁じることは不可能である。共同体は、成員に対して、自らの「間主観性」への服従を求めると同時に、それなりの反逆を許す、とも表現できるだろう。一方主観の側も、「間主観性」に寄り添い、そこに安住することを求める傾向と、そこから逸脱することを望む傾向とを、兼ね備えていることにもなる。

人間は、この二つの矛盾する力どうしの造り出す緊張関係のなかで、どこかに均衡点を見いだそうとして常に揺動しているダイナミックな存在、ということになるだろう。

すでにこれまでの記述でわかるように、集団体という概念は、色々な規模や層にわたって考慮することができるものである。家族、学校、地域共同体、民族、国家、あるいは会社のような職業的な集団、人々が任意に集まる集団などなど。いずれもが、上に述べてきたような性格を大なり小なり備えており、他方、一人の個人は、同時にいくつかの集団に帰属しながら、それぞれのなかで特異な均衡点を見いだしている。その意味で、一つの「主観」である個人は、同時に幾層もの「間主観性」のなかにいることになるだろう。

ということは、「主観」としての個人の自我もまた、幾層にもなっていることになる。しかもなお、自我は、不思議なことに、通常は「一つ」の存在として、統一されている。私たちの社会では、その統一が破れることは、病いとして判断されがちである。多層な「間主観性」に支えられ、またそこから逸脱する傾向との均衡点を探ろうとする、多層な「自我」を、どこかで統一している「自我」、それが人間の自我のもつ、最も興味深いところであり、人間の神秘とさえ呼べるのではないか、と思われる。

次の問題(1 - 40)には、それぞれ a , b , c , d の答えが与えてあります。各問題につき、a , b , c , d のなかから、最も適切と思う答えを一つだけ選び、解答用カードの相当欄にあたる a , b , c , d のいずれかのわくのなかを黒くぬって、あなたの答えを示しなさい。

1. 筆者は、一般の哺乳動物とは異なって、人間が育っていくためには何が必須だと考えているでしょうか。文中の次の言葉から最も適切と思われるものを選びなさい。
 - a. 「延長する子宮」
 - b. 「情報処理機構」
 - c. 「刺激の大海」
 - d. 「世界」

2. 筆者はヒトが直立二足歩行することによって「失った」ものもあつたと書いています。それは何でしょうか。文中に探すとすれば、次のうちどれでしょうか。
 - a. 大脳が肥大化したこと
 - b. 生得的な行動から逸脱すること
 - c. 母親依存になること
 - d. 文中では特に指摘していない

3. 哺乳動物に見られる一般的特徴として、筆者が「正当」と認めている特徴は次のうちどれですか。
 - a. 育児者が必要である
 - b. 授乳者が必要である
 - c. 家族が必要である
 - d. 群(共同体)が必要である

4. 文中で人間の脳の構造について、簡単な説明があります。現在日本で問題になっている「脳死」とは、この部分での説明と結び付けると、次のなかのどれが最も適切でしょうか。
- a. 大脳全体の死
 - b. 脳全体の死
 - c. 小脳の死
 - d. 脳幹の死
5. 文中で「狼少年」、「狼少女」の話が登場します。そこでは筆者が、専門家の判断に事寄せて、この種の話に留保を置いています。その理由として、次のうちどれが最も適切でしょうか。
- a. 伝えられる話が間接的な伝聞に過ぎない。
 - b. 伝えられる話が学術的な観察者によるものではない。
 - c. 伝えられる話が正確な資料として残されていない。
 - d. 伝えられる話が時代的に古く、伝承の間に変化している。
6. 「狼少年」、「狼少女」の話から最終的に筆者が導きたい論点は、次のうちのどれでしょうか。
- a. 人間の赤ちゃんには、人間以外であっても授乳者がどうしても必要である。
 - b. 人間の赤ちゃんには、人間以外であっても育児者が不可欠である。
 - c. 人間の赤ちゃんは、出生後の環境によって行動パターンが決定的に左右される。
 - d. 人間の赤ちゃんが「人間」として育つべき出生後の時間はほぼ決まっている。
7. 文中に「水棲動物」という表現が出てきますが、意味するものとして次のうちどれが最も適切でしょうか。
- a. 胎児はある時期に魚に似た形態になる。
 - b. 胎児は臍帯でガス交換をし、肺呼吸をしていない。
 - c. 胎児の血液成分は、海水の成分に近い。
 - d. 胎児は羊水のなかに浸されて生きている。

8. この文のキー・ワードの一つは「延長する子宮」です。筆者は生後七年くらいまでの社会環境を表すのに何故この比喻を使ったのでしょうか。次のなかから最も適切と思われるものを選びなさい。
- a. 哺乳動物の成熟にとっては、子宮は決定的に必要な環境だから
 - b. どんな場合でも、母親が育児の中心にならざるをえないから
 - c. 赤ちゃんにとって、最も安全で安心できる保護的な環境だから
 - d. 早産しなかったとしたらまだ子宮のなかに留まっているはずだから
9. 筆者は人間の新生児が生まれたばかりのときに無力であることを、どのように評価していますか。次のなかから最も適切なものを選びなさい。
- a. 他者からの助力を得て育つための条件として評価している。
 - b. とりたてて価値的な評価は下していない。
 - c. 早産する動物としての人間の弱点と見なしている。
 - d. 進化の過程での必然的な事態であるが、価値的には中立であると見ている。
10. 昔は新生児は「見えない」と思われていたのは何故だったのでしょうか。本文から見て最も適切と思われる理由を次のなかから選びなさい。
- a. 行動学的な知識が不足していたから
 - b. 解剖学的な知識が不足していたから
 - c. 心理学的な知識が不足していたから
 - d. 新生児のときの知覚を記憶している人がいないから
11. 筆者は、新生児について、一般の哺乳動物が出生直後に持っている能力を不完全な形で備えていると書いています。その上で、それがそのまま発育していったらいい「らしい」という推定をしています。その推定の根拠としては次のうちどれが最も適切でしょうか。
- a. 新生児が多くの潜在的能力をもっていることがわかったこと
 - b. 新生児の刺激に対する反応が完全ではないことがわかったこと
 - c. 新生児の原始歩行では介助が必要であることがわかったこと
 - d. 新生児の生得的能力は一旦消失することがわかったこと
12. 次の文章のなかで筆者の主張に最も近いものはどれでしょうか。
- a. 多くの「反射」は大脳を経由しないのでヒト的な行動と言える。
 - b. 多くの「反射」は大脳を経由しないので「人間」にとっては重要ではない。
 - c. 一般の哺乳動物は大脳を経由しない「反射」だけで生きている。
 - d. 大脳を経由しない「反射」は、一般に情報処理としては不完全である。

13. 筆者は「刺激の大海」という比喩を何度か使っています。それと同じ意味で文中で使われている語は次のうちどれでしょうか。
- a. 「間主観性」
 - b. 「刺激の万華鏡」
 - c. 「意味や構造をもった“何もの”か」
 - d. 「自然な体験の積み重ね」
14. 筆者はヘレン・ケラーに起こったことを表現して、何度か「劇的」という言葉を使っています。その理由として最も適切なものは次のうちどれでしょうか。
- a. ヘレンの場合は「三重苦」という類いまれな障害をもっていたから
 - b. 通常、ヘレンに起こったような出来事は、もっと若い時期に起こるから
 - c. ヘレンは、言葉と世界との関係を全く理解していなかったから
 - d. 通常は、日常の経験を通して、もっと緩やかに起こるから
15. 筆者は、言葉がコミュニケーションの成り立つ素地であると書いています。その理由としては、次のうちでどれが文意に最も添っているでしょうか。
- a. 共通の言葉が、共通の「世界」を約束するから
 - b. 言葉を翻訳するコードが得られるから
 - c. 人間に普遍的な言語能力が働くから
 - d. 言葉が思考の伝達の道具であるから
16. 「間主観性」ということについて、次の文章のなかで不適切と思われるものはどれですか。
- a. 「客観性」という概念に近い
 - b. 「主観性」という観念に近い
 - c. 共同体の存在が前提になる
 - d. 個々人の存在が前提になる
17. 筆者は「世界」という言葉を、「世界の国々」などという場合の使い方とは異なった意味に使っているように思われます。その意味は次のうちどれに最も近いでしょうか。
- a. 個人（主観）にとって、刺激を与えてくれる環境
 - b. 個人（主観）にとって、多様な情報源となる環境
 - c. 個人（主観）にとって、外的空間としての環境
 - d. 個人（主観）にとって、構造的に分節化された環境

18. 文中で「公教育」に言及されていますが、次のなかで筆者の考え方に最も近いのはどれでしょうか。
- a. 人間は七歳あたりで、ほぼ「間主親性」への参加の基礎ができる。
 - b. 人間は七歳あたりで、言葉を操る能力が完成する。
 - c. 人間は七歳あたりで、いわゆる自我が確立する。
 - d. 人間は七歳あたりで、集団生活ができるようになる。
19. 筆者は「ヒト」と「人間」という言葉を使い分けています。それはどのような意味なのでしょう。次のなかから最も適切なものを選びなさい。
- a. 進化の対象として論じるときは「ヒト」を、一般に論じるときは「人間」を使う。
 - b. 他の動物と比べるときは「ヒト」を、そうでないときは「人間」を使う。
 - c. 生物学的に論じるときは「ヒト」を、一般的には「人間」を使う。
 - d. 哺乳動物としては「ヒト」を、人間学的に論じるときには「人間」を使う。
20. 文中で言語の「抑圧」的機能について述べられていますが、筆者の考え方に最も近いのは次のうちではどれでしょうか。
- a. 言語の抑圧には人間一般に対する普遍性がある。
 - b. 言語の抑圧は言語圏によってケース・バイ・ケースになる。
 - c. 言語一般について抑圧性を問題にするのは無意味である。
 - d. 言語とその使用者との関係は抑圧かそうでないか一義的に決まる。
21. 「抑圧」という言葉の本文中での使い方に最も近い用例を、次のうちから選びなさい。
- a. 民衆は権力者の「抑圧」的施策に立ち上がって抗議した。
 - b. 精神分析の結果、幼児体験が「抑圧」として働いていることがわかった。
 - c. 「抑圧」は、政治倫理では、「正義」に反すると考えられる。
 - d. 社会の「抑圧」機構はできるだけ取り除かれなければならない。
22. 「文化」に関して筆者は定義のようなものを与えていますが、何故わざわざそうしたのか、理由として最も適切なものは次のうちどれですか。
- a. 「文化」は、人間にとって根源的に決定的な意味を持つから
 - b. 「文化」という言葉が価値的に使われることによる誤解を防ぐため
 - c. 「文化」には、時に応じて多様で曖昧な意味を与えられがちだから
 - d. 「文化」は、言葉によって規定される世界の総体として重要だから

23. 筆者は文中の図における線の長さの見え方の違いを、言語以外の文化の差に帰することを肯定しつつも、多少慎重であるように見えます。文意から想定される筆者の考え方は、次のうちでどれに最も近いでしょうか。
- a. 挙げられた事例は、生活の場の状況が知覚を決定するよい証拠としては弱い。
 - b. 「長い」、「短い」などの言葉の使用が、言語によって異なるかもしれない。
 - c. 知覚の差が何によって造り出されるのか、十分な科学的な説明が見られない。
 - d. 言葉の使い方以外の要素が知覚の差を生むことを決定するには証拠が足りない。
24. 筆者の「文化」という語の使い方に最も近い用例を次のなかから選びなさい。
- a. 日本は文化活動への国家支援が足りない。
 - b. 大衆の文化の軽度を高めるべきである。
 - c. 芸術は文化の一部である。
 - d. 国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。
25. 何が日本本来の音楽か、という議論は、何故やっかいだと言っているのでしょうか。次のうちから最も適切なものを選びなさい。
- a. 日本の版図は時代とともに変動するので、地理的に確定し難いから
 - b. 伝統的な音楽が何であるかを一義的に確定するのが困難であるから
 - c. 音楽のなかに純粋に日本的なものを抽出し同定するのは困難であるから
 - d. 歴史的に多くの国や地域からの流入によって伝統が形成されているから
26. アイルランド民謡やスコットランド民謡として日本に伝えられている音楽が、それらの地域の伝統音楽であるということにも問題がある、と筆者は書いています。何故問題だと考えているのでしょうか。次のうちから最も適切なものを選びなさい。
- a. 日本に入ってきたころには、現地でも近代化による変容を受けている可能性があるから
 - b. スコットランド、アイルランドという地域の同定に多義性があり、どこの伝統音楽かの判断に問題が残るから
 - c. 『夕空晴れて』のように、日本に入ったときにすっかり日本化されて、原型を失ってしまったから
 - d. こうしたものは、伝承の過程で、原型からどんどん変わっていくのが常だから

27. 音階と言われるものに関して、筆者は最終的にどのような意見を持っているか、次のうちから最も適切なものを選びなさい。
- a. 文化によっては、長調と短調の区別がないなど、音階の造り方が決定的に異なることがある。
 - b. 音階は、本来普遍的で、文化による差は、普遍的なものからの変化、ないしは不備（例えば、一部が欠ける）であると考えられる。
 - c. 音階は、文化に固有であって、ある文化に属する音楽は、つねにそれに基づいて造られている。
 - d. 音階は、ある地域の音楽で使われる音を、かなり乱暴に整理したものであって、大ざっぱな意味しか持たない。
28. 筆者は「伝統音楽」という言葉を使っています。同じ意味を表す言葉として、文中でほかに何を使っているでしょうか。次のなかから選びなさい。
- a. 「民謡」
 - b. 「旋法」
 - c. 「正しい音階」
 - d. 「歌」
29. 筆者は、ヨーロッパのいわゆる「クラシック音楽」(文中ではヨーロッパの「正統」音楽という表現がそれに当たる)に対してどのような理解を持っていると思われますか。次のうち最も近いと思われるものを選びなさい。
- a. クラシック音楽は、音楽のなかで特別に普遍的な価値を持っている。
 - b. クラシック音楽は、他の音楽よりも完全な形を持っている。
 - c. クラシック音楽は、単に音楽の一つの形に過ぎない。
 - d. クラシック音楽は、ヨーロッパ伝統音楽とは無関係である。
30. 筆者が「価値観」という言葉を使うとき、それは相対主義的な背景で使われているように思われます。その立場に対する批判として、最も適切と考えるものを、次のうちから選びなさい。
- a. 相対主義も一つの立場を主張する主義である以上は、論理的に成り立たない。
 - b. 価値は人間の本質に関わるもので、表面的には違っていても、結局は普遍、絶対なものである。
 - c. 問主観的に生きている人間も、絶対的価値基準がなければ、結局は生きていけない。
 - d. いかなる文化にも「美しい」と「美しくない」、あるいは「善い」と「善くない」の区別はあるはずだ。

31. 「牽強付会」という漢語が使われていましたが、その正しい読みは次のうちどれですか。
- a. さくきょうふかい
 - b. けんきょうふかい
 - c. けんごうふえ
 - d. さくきょうふえ
32. 「文化」に言及した際、筆者は、一つの文化に属する人々と他の文化に属する人々とを「亜種」という比喩を使って説明しています。その意味は、次のうちどれが最も適切でしょうか。
- a. それらの違いは生物学上の進化の際に起こる変異であると考えられるから
 - b. それらの違いは、同じ「ヒト」科に統括されることになる存在だから
 - c. そのなかでは人々の認知、判断、行動パターンがほぼ等しくなるから
 - d. 相互の違いが、種の間の変異とは言えないほど小さなものだから
33. 筆者は二種類の自由を人間に考えていると思われます。その自由を最も適切に示すものは、次のうちどれでしょうか。
- a. 生物学的自由と宗教的自由
 - b. 本能からの自由と「間主観性」からの自由
 - c. 共同体から逸脱する自由と神に背く自由
 - d. 他者からの自由と自己からの自由
34. 筆者は、個人が生育していく過程における「主観」の成立を論じています。次の文章のうち、筆者の考え方に最も近いのはどれでしょうか。
- a. 「主観」は内省を通じて自らのなかに徐々に確立されていくものだ。
 - b. 「主観」は「間主観性」への参加を通じて並行して形成されるものだ。
 - c. 「主観」は他者との関わりのなかで、その教示によって次第に悟っていくものだ。
 - d. 「主観」は他者に同化しようとする自己への反発として形成されるものだ。
35. 「間主観性」に関する筆者の見解は、次のうちどれに最も近いでしょうか。
- a. 個人にとって「間主観性」は決定的である。
 - b. 個人にとって「間主観性」はただ一つである。
 - c. 個人にとって「間主観性」は多様である。
 - d. 個人にとって「間主観性」は敵対するものである。

36. 「異文化理解」ということが問題になることがあります。筆者の立場からすると、それはどのように捉えられるとされますか。次のうちから最も適切と思われるものを選びなさい。
- a. 「異文化理解」が可能なのは、人間に「自由」が与えられているからだ。
 - b. 文化によって「間主観性」が異なる以上、真の「異文化理解」は不可能だ。
 - c. コミュニケーションの素地が共通でないから、「異文化理解」は成立しない。
 - d. 「異文化理解」は、「主観」としての個人の能力の如何にかかっている。
37. 筆者は人間の自由を論じるときに、キリスト教信仰における自由に言及しています。それを最も根源的に象徴するものを、次のなかから選びなさい。
- a. 人間が、十戒に背いてしばしば偶像を造り、それを礼拝したこと
 - b. アダムとイヴが知恵の実を食べてエデンの園を追われたこと、
 - c. 人間が、ノアの大洪水の原因となる多くの退廃的行動を重ねたこと
 - d. バベルの塔以来、人間は異なった言語を話すようになったこと
38. 「日本社会」、「アメリカ社会」という規定は大ざっぱ過ぎると書きながら、両者を比較しているところがあります。筆者は次のうちのどれを念頭においているのでしょうか。
- a. 日本人の創造性の欠如
 - b. 日本人の集団主義
 - c. 日本人の文化的閉鎖性
 - d. 日本人の進取の気性
39. 次の文章のうちで、筆者の意図に最も近いと思われるものを選びなさい。
- a. 「自我」は明確に確立されなければならない。
 - b. 「自我」と「他者」との関係は常時安定したものである。
 - c. 「自我」は本来流動的で揺動するものである。
 - d. 「自我」と「世界」との間には、本来的に明確な線が引ける。
40. 次の文章のうちで、筆者の意図に最も近いと思われるものを選びなさい。
- a. 「自我」は、多層的でありながら、統一的でもあるという矛盾を抱える。
 - b. 人間の不幸は「間主観性」と「主観」とが分裂するところにある。
 - c. 人間は、「間主観性」のなかに生きるときに最も安定する。
 - d. 「自我」は、「間主観性」に反逆することによって確立されていく。